

## PET・MR を用いた認知症画像診断ソフトウェアの活用

<sup>1</sup>岩井整形外科内科病院 メディチェック画像診断センター

<sup>2</sup>慶應大学病院 放射線診断科 <sup>3</sup>日本メジフィジックス

小松 孝志<sup>1</sup>, 竹政 和彦<sup>1</sup>, 稲波 弘彦<sup>1</sup>, 中原 理紀<sup>2</sup>, 氏川 正規<sup>3</sup>

### 【目的】

アルツハイマー病の診断技術や治療薬が近年目覚ましく進歩している。当院では、MCI～早期アルツハイマー病の診断が目的の一つとして、2007年5月から脳PET/CT 脳MRI、MRA 頸部MRA MMSEを組み合わせた「もの忘れ脳ドック」を開始している。認知症の正確な診断、早期発見に有用である脳糖代謝解析3D-SSP/SEE 脳萎縮の画像統計解析VSRADを診断の補助に用いている。これらの統計解析を組み合わせた3D-SSP/VSRAD SSPVViewの活用と使用経験を報告する。

### 【方法・考察】

SSPVViewはSPECT/VSRADで用いられているが、我々は自院NDBを用いFDG-PET/VSRADにて使用している。このソフトは3D-SSP FALCON内に組み入れることが可能で、VSRADデータをインポートすることで、解析も簡素に処理できる。SSPVViewは、糖代謝低下部位、脳萎縮部位を同一座標上で表示が可能であり、これらのFUSION画像は、各々の低下部位、共通低下部位を色分け表示する。この表示は、ドック受診者へ分かり易く説明できること、他科への結果報告に添付することなどで評価を得ている。FDG-PETとMRを組み合わせ、診断補助に統計解析を行うことで認知症画像診断の精度向上の一助となる。